

松葉屋通信



山と森、木と人々の暮らしを一本の糸につなげたい

まるごと松葉屋図鑑

家具をつくる、販売する、

それ以外にもいろいろなことをやっていて

考えている松葉屋のあんなこと、こんなこと。

店主善五郎の頭の中、場をつくっているもの、
やっていること、やりたいこと。

そしてなにより、人とのつながりや縁

みなさんの知っていることも

知らなかったことも

自分たちが少し忘れていたことも

思い出したりしながら

昔々の話から未来の夢、妄想話まで
まるごとの松葉屋を案内します。



1927



2017

1833年創業の 松葉屋家具店と善五郎のこと

創業が1833年の松葉屋家具店は江戸末期、現在の場所よりも善光寺の西側「桜枝町」にも製作工場があり、当時善光寺に向かって西側は山からの物資が降ろされ市が立ち、東側は北国街道から来た海産物が集まったので魚屋さんが多かった。そのため、冬は雪を集めて夏の冷蔵庫として使う「氷室」が最近まであったといえます。

「松葉屋塗物店」という漆器屋で何十人かの職人を抱えていた松葉屋が善光寺の西側に店を構えたのも、こうした物資の供給によるものかもしれません。

漆器屋から家具屋へ店名が変わった正確な年代は不明ですが、昭和2年の中央通りを撮影した写真の看板は「松葉屋塗物店」。法人化は昭和27年なのでそれ以前に現在の「松葉屋家具店」になったようです。

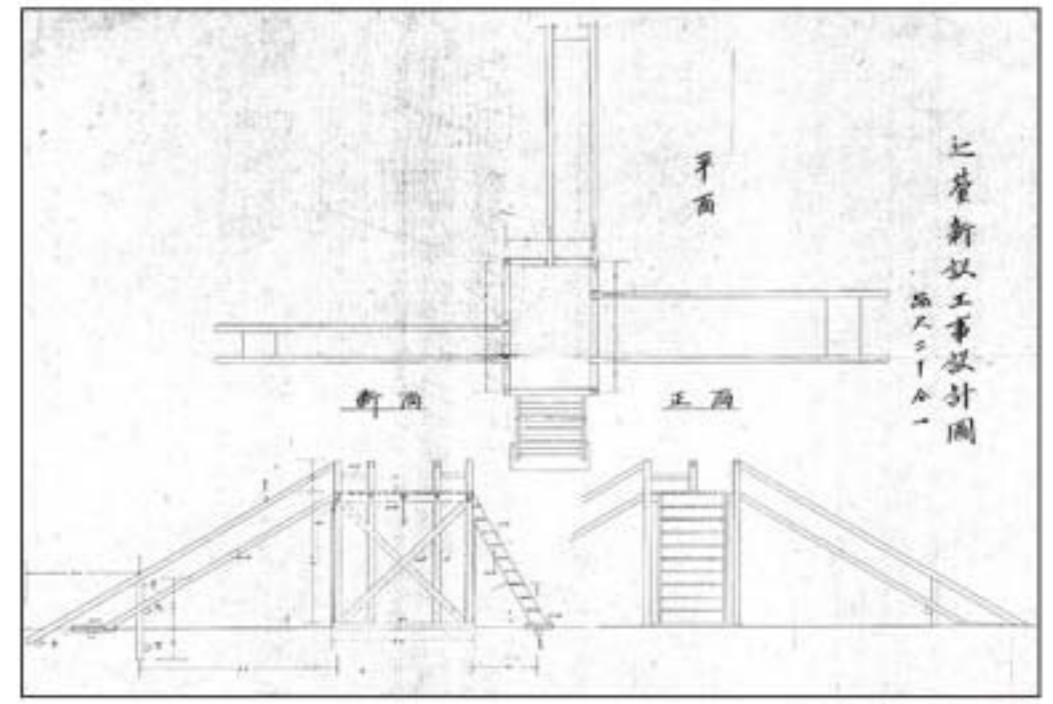
「僕のひいおじいちゃん、三代目の善五郎は、やり手だった。明治初期の商工会議所の文献で見ると、その時の主要な製造業者で役場とか学校の事務関係の机をたくさん作っていたみたいですね。今でも当時の図面で『学校の理科室の棚』や『木造の滑り台』とかいろいろ残っていて面白いですよ。」



明治21年 諸品大勉強商人一覽

男が戦争にとられる中、女手で守られた松葉屋は代を重ねて現在は7代目の善五郎。

「僕の子どもの頃、父の代は婚礼家具や贈答用の漆器などを扱ういわゆる一般的な家具店だった印象ですが、昭和初期の松葉屋は、アンティーク家具屋のような曲げ木の椅子が店頭に並び、当時としては先端な家具屋に見えますね。ほんと、カッコいい。」



滑り台の図面

7代目善五郎になって 少し前の松葉屋の話

学生時代、東京の美術大学へ通っていた現善五郎が長野へ戻り松葉屋を継いだのは26年前。奥の土蔵の壁を自分でペンキを塗り、今で言うセルフリノベーションでギャラリーをつくり、月に2回の企画展示をしていました。「忙しくて大変だったけどね。当時としては珍しい店舗とギャラリーとカフェが一緒になったお店の形態を覚えてくれている人もいて、器を探しに来られたり、コーヒー飲みに行らしてくれたり、しばしばあるんです。」

「カフェとギャラリーをやりたい」と7年くらいやったあと、スタッフが独立したりと人の入れ替わりを期に今のように落ち着く。



銘木市ではしゃぐ善五郎



「一枚板が夢っていうのはちょっとおかしいかなって思っただけ。美大に通っている時、木工を専攻していたんですよね、いちおう。その頃ちょうど木工作家ブームのはしり、僕の2、3年先輩が山に工房を構えて木工家をするとか、そういう時代だったの。オークビレッジや木工の先端をいっている人たちの、コロニーみたいなくらしや、ヒッピー文化とかカウンターカルチャーとか、そういうライフスタイルの名残に影響されたっていうのはあるかも。作品に魅力を感じたのはもちろん、この起こりは『つくり手の暮らし』に対する憧れから一枚板のテーブル製作に繋がったのかもしれない。」

大きな一枚板を松葉屋に 展示するのが夢だった



1995年の松葉屋(左)と奥蔵のギャラリー(上)



はい！七代目善五郎です。松葉屋は古くて朽ちたものと、刻々変化する新鮮な時間の流れを絶妙にかき混ぜて表現できたらいいな、と思っています。

たまざわ ぜんごろう
滝澤 善五郎

杉床 SUGI-YUKA

松葉屋の店内を素足ですごしていただけるようになりました。

シンプルで心から安心できる空間をつくっていくことが松葉屋の目指すこと。一般に床が無垢でも下地はベニアということが多いから、本当に暖かい床がどんなものか味わってもらおうことが松葉屋として必要と、靴を脱いで素足でゆっくり時間を忘れる空間づくりをしました。小さな子が靴下を脱いで走り回ったり、ハイハイをしたりしても安心。お店の中が暖かい雰囲気になります。

やわらかく、調湿性に優れた北信濃の杉をたっぷり使いました。下地には赤松を、接着には膠を使い、米ぬか油で仕上げた心地よくて、きもちのいい床です。



家具職人さんの手もお借りして、今回はスタッフで施工を行いました。



すざか だいじろう 須坂 大志郎

元大工、珈琲豆焙煎士。店内補修することがきっかけで松葉屋にやって来てスタッフに。そして合間を見て大工仕事。器用な優しき2児の父。コーヒーと古いものが大好きで、善五郎の趣味的アドバイザー(話し相手?)としても大切な存在です。



ハイエース

年式 平成13年、走行 30万キロ乗りつづけた100系ハイエースバン。ほんとうに僕らの相棒です。どこにでも見ることができた旧式のハイエースと一生つき合う。そんな思いで、全塗装、レストアしました。毎日大切に運転しています。



柏崎の住宅地にひっそりと佇む coil4 さん。idobata のすべてをディレクションしていただきました。なにからなにもまで、ステキなお店です。(coil4 柏崎市穂波町 9-20)

idobata

うすぼんやりとした記憶はどこで呼び返されるかわからない。小さい頃に家具を傷つけてお父さんに怒られた記憶も悪い意味ではなくて心に残っていたり。古い蔵の中のタンスを開けるニオイが何十年というものすごく前の時間を思い出すことがあるような、そんなうすぼんやりとした世界で表現ができれば。ここは子どもの頃から、井戸端と呼んできた場所です。



梁

100年以上経った建物の屋根うらを見てみたかった。来店する人たちにも感動して欲しかった。天井をはがしたら、思った以上の太い迫力ある梁がむき出しになったんだよね。身ぶるいするようなおそれに近い感情が今でもわいてきます。



誰も知らない細い細い奥小路。



善五郎と家族の家

松葉屋の奥の奥に、善五郎の自宅があります。昔の商家は職住一緒があたりまえ。子どものころはイヤでたまりませんでした。が、「やっぱり楽！」歩いて10秒で出勤だからね。



ギャッベ

家族が集まる居場所のために揃えた、気持ちのいい羊の毛のじゅうたん。ギャッベの先生今井さん(左)と選定してくれている岩澤さん(右)。



新小路へ

まるで倉庫のような空間です▼

まだあまり知られていない場所。idobata からさらに奥の扉を開けて松葉屋の裏側へ。細い細い車も通れない毛細血管のような路地を南北に進むと「新小路」というエリアに抜ける。少し前まで文房具問屋の倉庫で人気もなかった場所でした。こんな新しいにぎわいが生まれるなんて、夢に描いていたようなカタチになってきた気がします。



ふじさわ あつこ 藤澤 敦子

事務担当で顧客管理、経理、あとスタッフのサポートなどお願ひしています。只今中学2年と小学4年の反抗期真っ只中の息子2人の子育て奮闘中のママさん。



幸せを感じるの1人でのんびり、ゆったり、美味しい物を食べている時です。みんなの笑顔、何気ない日々の幸せのお手伝いができればと思っています。

至長野駅 ↑ 中央通り ↓ 至善光寺

2017.6.10(土) & 11(日)

森へいくツアー 里山と林業の2つの森林



山と森、木と人々の暮らし を一本の糸につなげたい

2年前から始まった「森へいくツアー」は森の成り立ちを知ること、自分たちが使う木がより身近になって、大切にしようという気持ちで、自分たちがもっと山を身近に感じる暮らしを知るべきだという思いから始まりました。今年6月のツアーは小谷村の「くらしして」さんで里山の暮らしを、大町の荒山林業さんでは森の力を活かした森の育て方を教えてもらえるツアーになりました。

◆くらししてさん

小谷村大綱に暮らす前田さん、北村さんの2組の家族。今回の宿泊場所にもなった「つちのいえ」を村からの委託で運営。宿泊者の受け入れや農山村体験ができるワークショップなどをされています。



◆細井岳さん

木こり・杣 Books (山頂本屋)の店主。木こりをしながら、休みの日は本を背負って登山をして山頂で本屋を開く。森へいくツアーのコーディネートをねがいました。

イタヤカエデを育てるために、 ウリハダカエデの伐倒

一人ずつノコギリを入れ、伐倒を体験しました。ウリハダカエデの足元にあった小さなイタヤカエデに陽が当たりました。



◆山仕事創造舎・香山さん

個人の林業家が集まる企業組合を設立。森へいくツアーでは、荒山林業さんの林業地の案内、伐倒の方法など教えてください、林業のこと木のことを何でも相談できる方です。



◆荒山林業さん

針葉樹と広葉樹が混ざり合った森林で、自伐型の林業を運営。森の中でのコンサートやお祭りなど、気軽に森林や林業に触れられるイベントも開催されています。



その時期の山との暮らしや木々の様子を、初めて出会った人同士と一緒に体感して楽しむこと。感じたことをそれぞれの暮らしを持ち帰られるツアーにしたいと思っています。自然が相手、お天気も含めてその時起きる出来事を一緒に楽しんでください!

いけだ なみこ 池田 奈美子

前職でこども向けワークショップの企画・運営をしていたことから、森へいくツアーの担当に。小さいけれど、力持ちで山登り好き。店内をちょこちょこ動き回っている、フットワークの軽い池田さん。



さっぱりと洗いをかけられた古い杉のガラス棚を、リメイク。いろんな角度から、いつも眺めていたものを飾りたいが、何も入れなくても美しい。



恵比寿の古道具屋から持ち帰ったフランスの古いパン皿を漆作家の飯塚直人さんに白漆皿に仕立ててもらった。わが家で毎日使っている。パンにリコッタチーズと柚子ジャム。



写真で見たフランスのアンティークの裁縫箱を、なんとか再現。文箱としても使えるように、中の仕切りサイズを何通りも探って、これに決めた。



「大好きな「くらしの道具」をつくり「名もない古くて美しい家具を復刻」する

「みんなが健康になること」が人生のテーマです。家族はもちろん関わってくる人々、松葉屋のお客さま、町も里山も森も、そこに生きるものも仕組みもみんな健康になっていくために、何ができるか模索中。旬をいただく、暮らしを豊かにする道具づくり、冬はスキー、春夏秋はキャンプと登山で体づくり、家の片付け。できることから一歩ずつ。

たきざわ よしこ 滝澤 佳子

目がつんでいるのに軽くて温かい。巻くといつものコートスタイルが洗練される…とファンがふえていく齋藤伸絵さんのマフラー。今年是一年通して使える、薄手のウールストールをつくっていただく予定。



身近な広葉樹や鹿革で家具をつくる

家具のトレーサビリティ

「山、林業、森の保全から、材料調達、家具製作、運送、200年後のメンテナンス修理までものの命のいく末を、僕の目で全部見渡せるようにしたい」「最初からおわりまで見通すことは、絶対の安心感になると思わない？ 農作物でよく言われる、トレーサビリティってこと。」

トレーサビリティとは、生産段階から最終消費、廃棄まで追跡が可能なこと。たとえば何千キロも離れたところから運搬された外国産の木材。たいへんな過程とエネルギーを使って持ってくる必要があるのか、日本にはたくさんのお木が山にあるのに、それを使わない理由が見当たらない。

「良いこと悪いことをはっきり見せてくれないこの時代。だったらまず経路をシンプルにして、ぜんぶ見通せるようにしたい。携わる人の顔が見えるってことかな。」

「家具を作って、良い技術ですね、きれいですね、だけではなく（それももちろん重要だけど）、素性のわかる1本の木から家具を作り出すことを、お客さんと一緒に作り上げていきたい。たとえば、一緒に樹を伐倒して、製材して、乾燥しながら10年間お預かりする。時が来たからお子さんの学習机をつくる。そういう家具づくりって理想的だと思う。今回森へいくツアーで一緒に過ごした、山仕事創造舎さんとならでできるんじゃないかと思うんですよ。」

森へいくツアーの繋がりが、これから何十年にもなっていく家具づくりの繋がりになりそうです。



信濃町で選定した山桜、栗、栓の長さ4mの丸太を8本。この材でテーブルや棚、学習机をつくれます。



食害のために年間4万頭捕獲されるといふ鹿。ほとんどが廃棄されてしまう肉はジビエとして、皮も革として家具製作に利用する。



◎ カネモクさん

岐阜・高山の広葉樹専門の製材、乾燥業者さん。長年の経験から導きだされる乾燥技術は一朝一夕ではできないこと。カネモクさんがいなければ安心安全な家具作りはできません。



製材から乾燥まで

製材機にセットされ、刃を入れる角度を細かく調整します。



長い刃に向かって丸太が動き、製材されていきます。刃を通り過ぎた後に現れる木目に釘付けです。



水分をたっぷりと含んだ製材したての板は、触ると手に水分が移ってしっとりするぐらい。



まるで飛行機が格納されているような、大きな大きな乾燥機。温度湿度を管理された乾燥機の中でしっかりと水分を抜きます。

松葉屋+くらし道具学研究所の家具の作り手はこの人たち！

たくさんの家具メーカーさんや木工の作り手とお付き合いしてきました。お互い長いことやっていると人と人の関係だから、相性があるのも事実。今は技術も感性も信頼し合える3人の作り手さんとお付き合いしています。

工房酒壺
酒井 聡 さん



工房酒壺として独立した1993年に松葉屋ギャラリーの企画展「木の机展」にポプラのシェルフデスクを出品して以来製作を担当しています。常に特注の単品製作なので、材の調達からすべてゼロから作り上げています。緊張感をもって製作させていただいています。

自由工房
新井 敏雄 さん



1992年独立前、松葉屋さんのギャラリーで開催された「木のクラフト展」に出品して以来の関わりになります。考えてみると、かれこれ25年以上になりますね（しみじみ）。松葉屋さんとは毎回あたらしく、つくったことがないような試みをさせてもらっていて、きれいな材で満足いただけるものづくりをこころがけています。

木と暮らしの製作所
代表 浦西 正幸 さん



2002年に独立して、2003年から松葉屋さんと一緒に働いています。昨年、「木と暮らしの製作所」としてスタートしました。松葉屋のパートナー工房としてもものづくり、家具づくりだけでなく、善五郎さんと信頼し合える良きパートナーとしてお付き合いしていきたいと思っています。

善五郎が案内する
松葉屋小ネタ。



4つの神様と
布袋さん

ずーっと昔から松葉屋を見守ってくれている神様たち。



おうち図書館

家具と本とコーヒー。おうちにいるような、ゆるやかな時間をすごす。家具の専門書や、雑貨、インテリアなどの本が読めます。



うさぎの門番

蔵の白壁に溶け込むようにウサギがいます。土蔵をギャラリーにした時にたまたま立ち寄ったお店で見つけて抱えて持ち帰って門番に認定。

鹿革の隅っこ



鹿革の椅子を張った時に残る端切れの使い道を探していたら、ちょうどいいところを見つけました! 店内椅子の値札に採用!

こどもインタビューの本

松葉屋に来てくれるこどもたちにスタッフ池田がインタビュー。家具のこと、遊びのこと、たくさん話してくれました。和綴の小さな本に製本。松葉屋の図書館で読んでみてください。

街路樹のカツラの木

夢は世界一の街路空間にしたいんです。カツラが生い茂って木陰にあるベンチにみんなが座ってくれたらいいな。そう思って毎日水やりしています。



象

造形作家の中村仁さんをお願いした松葉屋唯一の看板です。一度見れば忘れられない目力。



みつろうのローソク

「この花粉の黄色がここに似合うね」と佳子が時々灯す蜜蝋ろうそく。ほのかに甘く静かに、きれいに燃え尽きていく様が idobata に合います。

善五郎のつくってきたもの

だいぶ前のはなし。木で意味ない動きをする、何かをつくりたいと思った。パタパタしたり、トンカントンカン叩いたり。はやい話、意味ないのが役割だったり。



大志郎のコーヒー豆

僕らが毎日欠かさず飲む大好きなコーヒー。実はスタッフ大志郎が焙煎しています。善五郎好みは苦く苦く深煎りです。販売もしているのでお声がけください。



ネコのミイ



いつしかお隣の画材屋さんに棲みついたネコ。松葉屋伝統の名前、「ミイ」と勝手に襲名。呼んでも寄ってこないし、なつかないけどね。

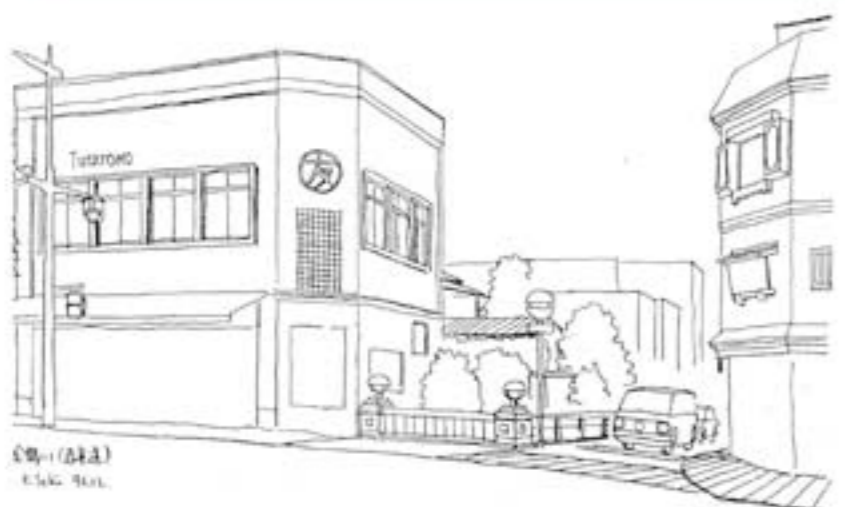
信州善光寺彫の家具

松葉屋家具店が伝統的に製作してきた家具です。善光寺本堂の総桂(カツラ)造りにちなみ、桂材に浮き彫りした木彫。梅、桜、水芭蕉、泰山木などの草花がモチーフです。



ヤモリのヤモちゃん

主に南となりのお宅の外壁で、虫がよってくるのを待っているヤモリくん。たまに松葉屋店内でも見かけるけど、同じヤモリかなあ? いちおう、松葉屋で見かけたヤモリは、「ヤモちゃん」と命名。手を出してもすぐ逃げる。ぜんぜんなつかない。



↑1996年に建築家 関邦則さんにイメージしてもらった鐘鑄川周辺の図

東京で見た親水路。
トンボや小魚が生息する環境→



「実は今では道路の下になってしまっているけど松葉屋のすぐ南側には「鐘鑄川」という川が流れているんです。一度地下に潜ってしまったら、暗きよになった見えないう川のせせらぎを取り戻したい。」

「僕はこのまちを森にします」
善光寺大門町界隈を森にするという、善五郎の妄想プロジェクトが始まります。
善光寺・大門町界隈には寺、神社が数多く点在している。
そもそも僕たちは鎮守の森に居させていたでいる存在なのだ。建物をつくるかわりに、そのお金を使ってまちに森をつくる。空き地があれば、味気ない公園にするのではなく、ちいさな森をつくって、森の中で子どもが遊ぶ。必要なことは、山の手入れをすると同時に、山そのもの、森そのものをつくりだすこと。

おしまいに

松葉屋通信 VOL.38



発行所:
松葉屋家具店+くらし道具学研究所
〒380-0841 長野市大門町 45
TEL : 026-232-2346
FAX : 026-237-4558
Email : since1833@matubaya-kagu.com
定休日: 水曜
発行日 2017年7月12日

こんなことも続けています。
アフガニスタン学校支援



2009年からはじまった松葉屋のアフガニスタン教育支援。SVAさんの協力のもと、2010年10月にナンガハル州スタンプル村に「シャヒド・アダムカーン小学校」の開校を経て図書室整備、紙芝居出版などの活動をしてきました。今後も細々とではありますが、継続してまいります。皆さまのご協力をお願いいたします。

まとめてくれたひと。

たくさんのアイデアをまとめて、つなげて、ひとつにしてくれるグラフィックデザイナーの本藤さん。いつも素敵な通信に仕上げられます。

恐縮です!

ほんとうに
本藤 麻以

